

# 2022年度 学術講演会プログラム・抄録集

## 「超高齢社会に対する歯科の役割と展望」

2023年 3月 5日(日) 9:00～16:30

学士会館

ハイブリッド開催

9:00～9:20 2022年度事業報告会

9:20 開会式 野本 秀材会長

会員発表 司会 遠藤 富夫先生

座長 栗山 壮一先生

9:30～10:10 護得久 朝滋先生  
新崎 博文先生

超高齢社会における当科におけるインプラント治療の  
取り組み

10:20～11:00 藤本 茂樹先生  
看護師 梶原 亜希子先生

多職種連携における歯科医師の立ち位置とその役割

座長 船木 弘先生

11:10～11:50 大橋 功先生  
DH喜田 さゆり先生

健康長寿を実現するためのフレイル予防  
～ 良質なSPTと歯科インプラント治療を軸とした歯科からの  
抗加齢医学 ～

市民公開講座

座長 野村 智義先生

13:00～14:30 市民公開講座  
大渡 凡人先生

全身疾患をもつ患者さんの安全な歯科医療を実現するための  
リスクマネジメント  
- 循環器疾患と局所麻酔、CKDと透析患者を中心に -

特別講演

座長 米山 俊之先生

14:45～16:15 特別講演  
古屋 純一先生

超高齢社会の口腔機能管理 2つのストラテジー

16:30 閉会

## 2022 年度 学術講演会 講演抄録

① 9:30 ~ 10:10

### 超高齢社会における当科におけるインプラント治療の取り組み



護得久 朝滋先生  
沖縄県  
あらさき歯科クリニック勤務

略歴 北海道医療大学卒業  
琉球大学病院 臨床研修センター研修修了  
あらさき歯科クリニック勤務

所属学会  
・日本口腔インプラント学会  
・睡眠歯科学会



新崎 博文先生  
沖縄県  
あらさき歯科クリニック院長

略歴 日本大学松戸歯学部卒業  
琉球大学医学部歯科口腔外科勤務  
医療法人博徳会 あらさき歯科クリニック開業

資格  
・日本口腔インプラント学会専門医  
・日本顎関節学会専門医  
・日本睡眠学会専門歯科医師  
・日本睡眠歯科学会 専門医・指導医

当科において、患者の高齢化によるインプラント治療の変遷について発表する。

#### 1. 初回インプラント治療を希望する患者の高齢化

歯周病がコントロールされていれば、8020 達成者でも、新規インプラント導入を QOL の向上と認知症と加齢に伴う口腔機能の低下を抑え健康寿命の延長を目指すために、自分の身体作りに投資する高齢者が増えてきている。また、この数年のインプラント禍の中、余暇のためや、趣味に貯めていた資金を、自分の身体に、投資することにシフトし、インプラントの導入を考える、高齢者も増えてきている。

#### 2. 高齢化に伴うインプラント治療の変遷

##### 1) より侵襲度の低い、患者さんに優しい治療法へ

###### ① 抜歯即時埋入

従来、重度のう蝕や歯周病等にて抜歯をした患者さんは、しっかりと骨ができるまで待ったり、付着歯肉が不十分で、良好な口腔衛生状態の維持が難しいと思われる患者の場合、十分に骨が出来るまで待ったり、骨造成法や歯肉移植を行う症例も多かったが、最近では、抜歯即時埋入と GBR を同時に行い、従来よりも治療期間を短縮する症例も増えてきている。

###### ② ショート・ワイドインプラントの導入

従来の適応では、サイナスリフトやソケットリフトを

行っていた、上顎洞底と口腔との残存骨の少ない症例や、下顎においては、下歯槽管が近く水平的な骨造成が必要な症例でも、5 × 5mm のワイド・ショートインプラントの活用により、患者の侵襲度を軽減し、治療期間を短縮する事ができるようになった。

###### ③ 2次手術に、切開しない CO<sub>2</sub> レーザーの使用

オステオインテグレーションの獲得後、アバットメントを装着する 2 次手術にいても、再度剥離したりして不要な侵襲を与えず、治療期間の短い、CO<sub>2</sub> レーザーを活用して、治療期間の短縮を考えている。

##### 2) ソケットシールドテクニックの応用

##### 3) ソケットブリザベーションテクニックの応用

#### 3. 患者の高齢化に伴う、長期間のフォロー中に起こるインプラントのトラブルについて

粘膜骨膜下インプラントや、ブレードタイプインプラント予後不良症例の対策や、国内外を問わず、他歯科医院で埋入されたインプラントの ID が不明の予後不良症例のリカバリーについて、日先研の「このインプラントなに?」を、各メーカーのインプラント ID を、データベース化ができると、これからのインプラントのメンテナンスの上の問題に、大きく貢献できる可能性が有るとも考えます。

## 2022年度 学術講演会 講演抄録

② 10:20 ~ 11:00

## 多職種連携における歯科医師の立ち位置とその役割



藤本 茂樹先生  
藤本歯科診療所 院長・管理者

## 略歴

1980年 朝日大学歯学部(旧岐阜歯科大学)卒業  
緒方歯科医院(山口県防府市)勤務  
1983年 藤本歯科診療所(山口県光市)副院長  
2008年 同診療所院長  
2012~16年 (一社)光市歯科医師会会長  
(公社)山口県歯科医師会代議員  
(公社)日本口腔インプラント学会専門医・代議員・専門  
歯科衛生士試験委員  
やまぐち糖尿病療養指導士

現在、日本は先進国の中でも群を抜いて超高齢化社会  
となっています。

国が少子高齢化対策に本腰を入れない限り、地域差は  
あれ今後この傾向は進むでしょう。

山口県は、全国でも有数の高齢化率であり、その中で  
も光市は県下でもトップクラスに高齢化が進んでいる地  
方都市です。それに伴い訪問歯科診療をされている歯科  
医院も増加傾向であり、今後もこの傾向は続くと思いま  
す。しかし介護保険請求をしている歯科医院はまだまだ  
少なく、介護現場における歯科医師の役割は、現状では  
かなり低いと言わざるを得ません。

多様化する高齢者への対応に対して、福祉・介護・医  
療従事者が連携を取って今後の高齢者を支える仕組み作  
りが必要であることは以前から言われていました。しか  
しながら異業種間連携という大きな枠組みの中での歯科  
医師の立ち位置や役割が明確でない、もしくはよくわか  
らない、あるいはこれから異業種間交流をどのように立  
ち上げていくのか迷われている歯科医師も多いのでは  
ないかと考えます。

そこで前半の私の講演では、光市における介護・福祉・



梶原 亜希子先生  
株式会社ともにあ  
訪問看護ステーションつむぎ  
代表取締役・管理者・看護師

## 略歴

1994年 九州大学医療技術短期大学部 看護学科卒業  
九州大学医学部付属病院 看護部勤務  
1998年 特定医療法人弘医会福岡鳥飼病院 看護部勤務  
2002年 医療法人陽光会光中央病院(山口県光市)看護部勤務  
2004年 社会福祉法人光寿福祉会光寿苑(山口県光市) 居宅介護  
支援事業所介護支援専門員  
2008年 山口県厚生農業組合連合会 周東病院(山口県柳井市)  
訪問看護ステーションいちご  
2012年 株式会社ともにあ(山口県光市) 訪問看護ステーション  
つむぎ開業

医療連携の会「つながる輪ひかり」がどのような経緯で  
出来たのか、どのような活動をしているのか、今後にお  
ける課題はあるのか、さらには当歯科医院と訪問看護ス  
テーションとの連携のいきさつ、そしてその中での歯科  
医師の役割や立ち位置は何かというようなことを、症例  
を紹介しながらお伝えしたいと思います。

後半の梶原先生の講演では、訪問看護ステーションを  
開設するに至った経緯、訪問看護ステーションとはどの  
ような仕事か、利用者さん宅への訪問看護にいたるシス  
テム、介護現場においてどのようなケースで訪問看護師  
から歯科医師への訪問診療依頼をされるのかなど症例を  
交えて現状をお伝えいたします。

したがって、在宅もしくは施設への一般的な訪問歯科診  
療や口腔機能低下症において咬合力測定・グルコース検査・  
舌圧測定など、歯科医師のすべき医療行為等技術的な話  
よりも、いかにして異業種間連携をとるのか?その中での  
歯科医師の立ち位置・役割は何なのか、さらには訪問看護  
師の仕事の具体的内容にもフォーカスをあててお話をし  
ていこうと思います。この講演で今後異業種連携を考えら  
れている先生方の一助になればと思います。

## 2022 年度 学術講演会 講演抄録

③ 11:10 ~ 11:50

## 健康長寿を実現するためのフレイル予防

～ 良質な SPT と歯科インプラント治療を軸とした歯科からの抗加齢医学 ～



大橋 功先生  
東京都開業  
おおはし歯科医院

## 略歴

1992年 東京医科歯科大学歯学部歯学科卒業  
1996年 東京医科歯科大学大学院(高齢者歯科学分野)修了  
2001年 おおはし歯科医院 開業  
2019年 東京医科歯科大学歯学部 非常勤講師

## 所属学会

- ・日本抗加齢医学会認定専門医
- ・日本口腔インプラント学会認定専門医

我が国において100歳以上の人口は、調査開始の1963年には153人であったが、2022年には9万人を超えている(住民基本台帳)。この記録は過去最多を更新し続けており、百寿は身近なこととなってきている。これは戦後、他国に類のない高度な経済成長を遂げ、安価で優れた医療システムを継続するとともに、衛生的な衣食住を獲得できたことにより達成できたと考えられている。その一方で、急速に超高齢社会を迎えた日本において、健康寿命の延伸は喫緊の課題となっている。男性が約9年、女性は約12年といわれる要介護状態の期間を短縮し、人生の後半を充実し自立した数十年とするために歯科はどのような貢献ができるのであろうか。

厚生労働省によると、100歳まで元気の鍵はフレイル予防とその対策であるとしている。フレイルには身体的、心理的、社会的の3つがある。その対策の鍵となるものとしては、それぞれ栄養、運動、社会参加であるとされている。我が国においては、中年期までは肥満が問題となるが、65歳以上の高齢者には、栄養不足(量と質)が問題となってくる。その主要原因の一つとして、歯の喪失による咀嚼機能の低下による摂取食物の偏りが考えられている。



喜田 さゆり先生  
おおはし歯科医院

## 略歴

2016年 東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科修了  
2019年 神奈川歯科大学大学院歯周病学分野所属  
2001年 おおはし歯科医院 勤務

## 所属学会

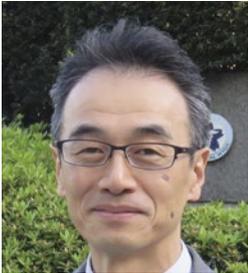
- ・日本抗加齢医学会指導士
- ・日本口腔インプラント学会認定インプラント専門歯科衛生士
- ・日本臨床歯周病学会認定歯科衛生士

おおはし歯科医院では、開業当初から抗加齢医学と出会い、その考え方に賛同して抗加齢医学を歯科の分野で実践してきた。抗加齢医学とは、「健康で長寿を享受することを目指す理論的・実践的の科学である」(日本抗加齢医学会)とされている。当院では抗加齢医学における歯科の役割として、若いうちから歯を喪失して機能を低下させないように予防すること、また歯を失ってしまった場合は、インプラント治療を中心とした咀嚼機能の回復と栄養学的サポートによる健康維持という治療方針を開業以来20年以上実践してきた。それは、暦齢等に左右されず、患者個々の身体的・精神的・社会的状況を考慮し、咀嚼機能低下を予防・改善することを目指した歯科治療である。その結果、継続的に長期に来院される多くの高齢患者が咀嚼機能を維持または回復し、栄養学的配慮をしながら自らの食べたいものを食べ、積極的に社会活動に参加するなど自立した生活を送ることを実現している。

近年では、口腔機能と全身疾患やフレイルとの関係についての信頼できるエビデンスも増えてきている。今回は当院での症例を供覧しながら、歯科の立場から健康長寿を目指した抗加齢医学的取り組みの例を紹介させていただきたい。

## 2022年度 学術講演会 講演抄録

## ④ 13:00 ~ 14:30 市民公開講座



## 全身疾患をもつ患者さんの安全な歯科医療を実現するためのリスクマネジメント - 循環器疾患と局所麻酔、CKDと透析患者を中心に -

大渡 凡人先生

公立大学法人九州歯科大学  
リスクマネジメント歯科学分野 教授  
口腔保健・健康長寿推進センター（兼任）

### 略歴

1983年 九州歯科大学卒業  
1987年 東京医科歯科大学大学院歯学研究科歯科麻酔学修了  
1987年 新潟大学歯学部第1口腔外科学講座助手  
1989年 東京医科歯科大学歯学部歯科麻酔学講座助手  
2000年 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔老化制御学講師  
2006年 国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科助教授  
2007年 国立大学法人東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科准教授  
2016年 公立大学法人九州歯科大学 口腔保健・健康長寿推進センター教授  
2019年 公立大学法人九州歯科大学 リスクマネジメント歯科学分野教授(兼任)  
2021年 公立大学法人九州歯科大学 生体機能管理学講座長

ますます加速する人口高齢化は、さまざまな全身疾患をもち、多くの薬剤を服用する歯科患者さんを増加させています。その結果、歯科臨床における全身の偶発症のリスクは確実に上昇しています。歯科医療が安全でなければならないことは当然ですが、その実現は容易でなくなりつつあるといえます。

歯科臨床における全身の偶発症の発生率を下げ、重篤な結果を招かないためには、医学的エビデンスに基づいたリスクマネジメントが必要です。演者は、このリスクマネジメントのプロセスを、「予防」、「早期発見」、「対応」の3つに分けて考えています。このうち、最も有効なのは「予防」であり、ついで「早期発見」です。全身の偶発症発生時に、短時間のうちに正確な診断を行い、適切な薬剤や機器を用いた「対応」を行うことは、われわれ歯科医療従事者にとってハードルが高い医療行為であるといえます。また、CPR（心肺蘇生）の成功率は予想以上に低いこともわかっています。このようなことから、「予防」に徹し、全身の偶発症の発生率を下げるのが、最も現実的で理にかなったリスクマネジメントであるといえます。

質の高い「予防」を行うためには、正確な医療情報（病歴、薬剤、理学的検査、医師から提供された患者医療情報など）を入手し、それを適切に評価し、起こりうる全身の偶発症とその確率を見積もり、医学的エビデンスに基づいた、有効な対策を論理的に構築する必要があります。

高齢者が合併する全身疾患のうち、最も多いのが循環器疾患です。そして、歯科臨床で発生する全身の偶発症も循環器関連がほとんどです。忘れてならないことは、循環器系の全身の偶発症は、例えば心室細動や急性心筋梗塞のように、短時間で死に至るリスクがあるということです。さらに、歯科における死亡事故統計では、局所麻酔に関連するものが最多であったと報告されています。

以上から、最も効率的なリスクマネジメントは、循環器疾患患者の局所麻酔にフォーカスすることではないか、と演者は考えています。一方、CKD（chronic kidney disease, 慢性腎臓病）と透析患者も増えつつあります。一見、関係がないように思われますが、実は循環系イベントと深く関連しています。

講演ではこれらの問題点にスポットを当て、最新の知見を交えながら、歯科医療における安全を担保するためのリスクマネジメントについて解説させていただく予定です。

## 2022年度 学術講演会 講演抄録

## ⑤ 14:45～16:15 特別講演



## 超高齢社会の口腔機能管理 2つのストラテジー

古屋 純一先生

昭和大学歯学部高齢者歯科学講座准教授

### 所属学会

- ・日本老年歯科医学会 認定医・専門医・指導医・評議員・摂食機能療法専門歯科医師
- ・日本補綴歯科学会 専門医・指導医・評議員
- ・日本摂食嚥下リハビリテーション学会 認定士・評議員
- ・日本静脈経腸栄養学会 学術評議員

### 略歴

- 1996年 東京医科歯科大学歯学部卒業
- 2000年 東京医科歯科大学大学院歯学研究科高齢者歯科学専攻修了(歯学博士)
- 2005年 岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座
- 2013～ Harvard School of Dental Medicine 留学
- 2014年 Harvard Dental Center Part-time Faculty
- 2014年 岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座
- 2015年 東京医科歯科大学大学院地域・福祉口腔機能管理学分野
- 2020年 昭和大学歯学部高齢者歯科学講座

### 著書

- ・鈴木哲也のよい義歯だめな義歯2 (共著)
- ・コンプリートデンチャー～ランクアップのための知恵と技～(共著)
- ・歯科が知っておきたいNST～栄養と食生活指導のエッセンス～(編著)
- ・かかりつけ歯科医のための口腔機能低下症入門(共著)
- ・高齢者の状態に合わせた義歯・補綴治療(共著)
- ・訪問診療での歯科臨床(共著) ほか

高齢者歯科を専門として、外来と訪問で補綴歯科治療を含めた口腔機能管理を担当しているが、医療・介護における多職種協働の一環として口腔機能の問題に対応する機会が増えているというのが昨今の実感である。

口から食べる機能、すなわち咀嚼・嚥下機能は、歯や唾液など口腔の環境と、舌や咀嚼筋など口腔の機能、そして口腔を動かし食物を認知する脳機能が統合された結果である。そのため、高齢者の高頻度治療である有床義歯治療、口腔ケア、摂食嚥下リハビリテーションは、統合的に提供される必要があり、また、疾患、廃用、老化などの要因によって修飾されることを考慮する必要がある。当然、歯科医療は多職種連携や多職種協働におけるTrans-disciplinary なチームアプローチの中で行われるべきであり、そのアウトカムも咬合の回復ではなく、食支援でなくてはならない。おいしく食べることは、生活における最高の楽しみであり、同時に最良の栄養摂取法なのである。

今後の地域包括ケアにおける歯科の役割は、外来・訪問を問わず、高齢者の口腔機能を適切に管理することである。特に、訪問診療において多職種からの期待が高い有床義歯は、口腔の環境を改善し、口腔機能を一気に回復する可能

性がある。しかし同時に、義歯を入れる前と後のケアが重要であることを知っておきたい。訪問診療における補綴歯科治療は、「口腔機能を最大限に引き出す」ことがポイントであるが、そこには限界が存在することも事実である。

一方、ささいな口腔機能の低下から始まる口腔機能低下を意味するオーラルフレイルが、全身のフレイルや要介護のリスクとなりうるのが近年明らかとなっている。訪問診療における補綴歯科治療の最良の対応策は要介護にしないことである。そのため、外来と訪問がつながっていることを強く意識し、歯科外来に通えるうちに補綴歯科治療を適切に行い、やはりその前後のケアで「口腔機能を最大限に貯金すること」が、将来の訪問診療の備えとして重要なのである。

超高齢社会における口腔機能管理を目的として、2018年に外来と訪問で口腔機能を管理するための口腔機能低下症という病名が公的保険に導入されて、4年が経過した。そこで本講演では、外来と訪問における高齢者の補綴歯科治療と口腔機能管理について、演者が行ってきた臨床と研究の両面から整理し、口腔機能という歯科の専門性とそのストラテジーについて、改めて皆さんと一緒に考えてみたい。